里見八犬傳 第九輯 巻十

特
600
250

曲亭翁編述

里見八犬傳

第九輯中套七号

出像 柳川重信氏画

書林 文溪堂刊行

600
250

八犬傳第九輯中帙附言

本傳ハ文化十一年甲戌の春。書賈平林堂の板元の為ニ第一輯の腹稿を思ひ起せ
ふ。平林堂頽齢既ニ七旬。長編の刊行做ー果さん乎心許なしとそ。夥計の書賈山青
堂ニ譲らんと請ひ。乎その意ニ儘して。當時稿本五巻を山青堂ニ取らしけり。かくて書
画。剞劂の工成りて。翌年の冬。始て世ニ見ることゝなりぬ。十三年丙子の春正月第
二輯五巻を續出すに及ぶ。世評いとく喝采。看官ニ復後輯の出ると俟て。一日千秋の
如しとゝ。是よりして後。山青堂多慾の故ニ他支ニ就ると。ゆえに刊行等閑の年旬これ
あり。第三輯五巻ハ文政二年己卯春正月續出ー。第四輯四巻ハ三年庚辰冬十二月
發販ー。第五輯六巻ハ六年癸未春正月續出ー。第一輯を刊行の年よりして。あハ
至て十ヶ年ニ。あまり。然ハ毎編出すと。侯々。看官渇望せざるなく。堂ニ球拯王ニ異ならざるの
時好ニ稱ひしの。今昔無比と。ゆえなり。刊行の書肆ハ等閑なる。贏餅を他債の為ニ果
本錢續ぎ。あまりニ。新舊五輯の刻板を。浦泉堂ニ賣與へ。第六輯よりの下續

に。剞の書賈替りて。第六輯五巻（五の巻と發壹て上下とも本輯即六巻なり。）十年丁亥春正月浦泉堂ゟ刊行。第五輯發販の年より〳〵中絶ゟ五ケ年ゟ。かくて第七輯七巻。おゝ〳〵年の冬十一月稿本既ゟ成るのゟ。浦泉堂も亦本錢續ぞその上帙四巻。書林文溪堂の資助ゟ。十二年巳丑の冬十月廿九日ゟ發販せ〻と。當時予いさゝとも知る。下帙三巻。十三年春正月辛〻て續出とゝゟ。浦泉堂も等閑ゟて理義を思ひ始ゟ。〻て校閲と一字も作者ゟ。ぞりけるべ。庸書測人の為ゟ謬まそ。稿本と同じゟ〻ざるものヨヌくゟ。況七輯發兒のよゝと。報るこもるゟ〻ゟ。予いその例ゟ違るを。名めて云云とゝ〻。折書林永壽堂文溪堂等ゟ為ゟ勸解るゟ。急狀とのくゟ〻。陪話數四ゟ及びゟけるを。予聽ざるんいさまざゟて。ゟふゝもるく已ゟけり。かゝ〻程ゟ浦泉堂ゟ後輯の刊行ゟ。微力足るゟけまべとく。第一輯より七輯まゝ。所藏の剞板を沽却せ〻ゟ。大阪の書林某甲ゟ。購得くゟて去ゟとゆゝさゝ。然而第八輯より以下の刊行ゟ。文溪堂ゟ購受て續出ゟ。ゟふるゟ〻ゟ。本傳新舊の板家扶ゟ。江戸大阪と両家ゟ。ゟふりゟ第五輯より下ゟ。ゟふ至て刊行の書肆の替り〻ゟ。前後都て四名ゟ。且ゟ。結局ゟ至〻ゟ。ゟふゟ。その板分れて七輯まで。遥ゟ浪速ゟ售遣られて。予ゟ毫ゟも識らゟ。彼地の書肆の藏板ゟりけゝと思へ。一奇とゟいまくのゟ。識者ゟの折眉と顰めて。江戸の花と失し愛と。嗟嘆ゟけるもありと。孤ゟゆさ遮莫ゟ。車ゟ第八輯より下ゟ。江戸の書肆ゟ刊行せる。文溪堂の所藏ゟるまべ。作者の面と起ゟ。ゟ。栄辱得失物皆ゟ。ゟ。本ゟのゟ限ゟ。是ゟ。ゟふゟ。ゟも有為轉変の速ゟると思ゟ足れゟ。かくて第八輯ゟ。江戸の書林文溪堂ゟ刊行〻ゟ。天保三年壬辰仲夏五月二十日ゟ上帙五巻（四の巻と上下二巻）と。下帙五巻（二巻と上下）と。ゟ。ゟ四年癸巳春正月續出〻。第九輯上帙六巻ゟ。今茲乙未春二月二十日ゟ發兒〻ゟ。中帙七巻ゟ。今番出せり。又下帙（五巻）巻ゟ。明年丙申の春秋遅く成るとも。秋冬の時候まで。必ゟ續出〻ゟ。大因圓ゟるさゟく。欲ゟかれゟ。六輯以下の分巻共ゟ六十八巻一百三十八回ゟ。竟ゟ全部さゟんのゟ抑策子物語のゟ。かく長安ゟ續るゟの書の外ゟ。ゟ見ゟ。天〻作者ゟ。意ゟ。借ゟて。ゟの筆ゟ。ゟ〻ゟ。ゟ。餘年の久〻ゟ。飽ゟ。ゟ。堪ゟ。ゟの結局ゟ世の人ゟ

天を仰ぎて嘆かるゝんと命ある時あり。固圓將ふ近くんとまゝある憾しあるめでる。稗官寔利を稱ひふけんと思ふも烏許の所為ゆゑあり。けり。

その書第五輯まゝい一帙五巻と二輯とまゝ第五輯の六巻ゐるハ四輯の足らざると補へるゐ。あゐふ第六輯より以下い涌泉堂ゐゑふ儘して或ハ六巻と一輯と一或る七巻と一輯とまかくて第八輯ふ至りてい文溪堂の需る為ふ十巻二帙と一輯とまゝ第九輯ハ巻の數ゐゝまゝく ヨヤくゐゐつ二十巻と二ふ分ちて上帙中帙下帙とまゝと第五輯まゝの如く毎輯五巻ゐゝんゆい十三輯ふ至るべ。然るとゝ九輯ふ約めハ文溪堂の好ふあゐれと今ゆゝ思へば。ゆゑもよしあり。八を陰數の終りとハ十ふ十ふれども十八一ふかふとゝ。陰數の終りとせば九を陽數の終りとかれば八犬英士の全傳局と九輯ふ結ぶとゝ。その所以ゐるべふあるべかり。

吾嘗唐山の稗史を見るふ水滸西遊記傳の如き旦足大筆のゐ段とハくども水滸ハ一百八箇の豪傑。その人極めゝ多けれい史進魯智深楊志武松等。全傳所ゐの豪傑ゐるふ梁山泊ふ入りしゝ。その勢ひ始ふ似ゞ。俱ふ軍陣ふ位むの外ハ。あらとハへども。

如し。況百八人ゐゝ及者ハ始ありて終ゐゝく。俗ふ云立滅せざるハ稀ゝ又西遊記ハ云藏師徒孫猪沙と是四名のゝその人極めて寡ければ其支相似て且重復ヨヤくゐ水滸ゆも亦重復あり。長物語ハ覚ぎして彼重復の瑕疵ゐるとゝ年來みゞゝ筆を把て是ゐの苦海ふ墮落せざるべ。所以ありけり。と悟るふ由ゐ。最烏許がまゝに説話ゐれども本傳ハ始より用意をきく加減あり。迺水滸百八人の百と除そ八犬士あり又加るふ八犬女あり。且里見侯父子と、大と俱ふ一十九人是と一部の主人公とまかれば。その人ヨヤくゐゝまゝ又その人寡くゐゝまゝ水滸の旦里と西遊の寡ゐゆハ似るべゐもあゝゝ。その餘も忠臣義士ハ彼此ゝ彼此ゝ。その者とハくども始めば終あり中途ふして立滅せ者一人とゝくあふとゝ。看官徐ふ結局ゐゝ見ハ作者の用意を知るゝあゝん。

唐山元明の才子ゐゝ作ゐる稗史ゆハ。おのゝゝ法則あり所謂法則を一ふ主客一ふ伏線三ふ襯染四ふ照應五ふ反對六ふ省筆七ふ隱微即是のゝ主客ハ此間の能樂ふふシテワキの如し。その書ふ一部の主客あり又一回毎ふ主客あり。主も亦客ふるとあり。客も

亦主ふるゝ所なるべし。壁言び象棋の起馬の如し。敵の馬と畧ゝ云いその馬どもて彼攻我馬と喪へば我馬ともて苦しめらる。変化安おそ疆りあゝん是王客の崖略と又伏線と襯染いその事相似く同ドゝ。所云伏線い後ふ必生ぜべ趣向あると。数回以前ふ此一思打とそ置くゆえ又襯染い下染ゆ。此間ふいふまこみのゆえある後ふ大関目の妙趣向と出きんとそ。数回前よりその事の起本來歴と措へ金瑞が水滸傳の評注ふ縊染ふ作ゝと。即襯染とあるど共ふあさそと訓むべ。又照應い照對ものふ壁言が律詩ゆ對句ある如く彼と此と相照ゝゝ。趣向ふ對と取るとふかゝ照對い重復ふ似れども。必是同ドかゝ重復ち作者諺て前の趣向ふ似る事と後ふ至て復出ぜとゆ又照對い故意前の趣向ふ對応取く彼と此と照ゝゝ。壁言び本傳第九十回ふ船虫媼内ゞ牛の角とりて戮せるゝい第七十四回北越二十村る。閑牛の照對と又八十四回る大飼現八ゞ千住河ふて繋ゝ舟の組繋ふい第三十一回ふ信乃ゞ芳流閣上る組繋ふの反對と這反對い照對と相似て同ドゝ。照對い牛と牛ふ對るゞ如し。その物い同ドけれども。その事い同ドかゝ又反對いその人い同ドけれども。その事い同ドゝ。信乃ゞ組繋ふい閣上ゆ繋ゝ舟あゝ。千住河の組繋ふい船中ふて樓閣ゆ。且前ふい現八ゞ信乃と捕捕んと欲りし後ふい信乃と道節ゞ現八を捉へんとも。情態光景太く異へんとゝ。反對とも事い此彼相反て。ちのゞゝふ對応做を。枚挙るふ皇あゝ。餘い做らへゝ知るべ。又省筆い畫長のゆ本傳ふいふの對ヨヲ。後ふ重ていざゝん為ふ必ゆゝで稱ぬ人ふ偷聞させて筆と省ゆ。或い地の詞とそ。作者の筆と省くゞ為ふ看官も亦倦ざるゝ。その人の口中より説出ぜとゝ。脩ゝゝ。又隱微い作者の文外ふ深意あり。百年の後知音と俟く。是と悟らゆんとも水滸傳ふい隱微ヨヲ。李贄金瑞ものいへゆゝ唐山る文人才子ふ水滸を弄ゞ者ヨヲ。されども評ゝゝ詳ふ隱微と發明せゝめゝ。隱微い悟りくけれども。七法則をゝ知るゝ。そ繁るのさそゝゝん及ゞぎゝゝ本傳ふい彼法則ふ做ふと。ヨヲ又但本傳のゝゝ。美少年録侠客傳ふの餘も都て法則あり。看官これを知るやゝゝぞ。子夏曰小道とへども見るべ所者あり。嗚呼談何ぞ容易ゝゝん。これらのゝゝい知音の評ふ折ゞ啓

へーとぞ〻〻亦看官の為ふ注しつ。

予が毎ふ編る策子物語の寫本いち〻〻彫果る折巻々を校閲せざるこゝなけれど刊行の書肆

肆どもは性急るゝ者もあるければ作者のゝろふ儘せ取ひまヨりも且その巻々ハ已が綴れる衣ども

るとゝ眼ふ熟れてゝぞ忘れぬとゝるゝ幾回も讀復せば誤寫ありとゝ心つゞ暗記の隨ふ讀

るゝ〻〻動もとゝ検送し。後ふ悔〻思ふの勘ゝるゝぞ総く刻本ハ書画倶ふ人ふ誂へく。

板下てふ物と調へぬれば必その板下ふ訛舛るゝとゝゝるゝ是ふ加るふ剛人の誤刀あり。半頁

十行ゝるゝ真名毎ふ傍訓あれば真名と假名と二行ふゝるゝ半頁二十二行ふゝるゝ。その

文字幾百ゝるゝと知〻ぞ。然ゝるゝと熟ゝる眼も最も急迫〻く校閲ゝるれば検送も誤脱ヨゝり

ゝゝと事過ぞゝるハ姑図ぬ本輯上帙六巻ふも筆工の誤寫ありーと出版の後ふ見出ーゝゝぞ

ゝとゝぬゝ左ふ録せ一の巻七行・廿八丁背・荊荷當ふ荊軻ふ作るべ。荷ハ誤寫ゝ二の巻十五行・廿

正行當ふ正儀ふ作るべ。六の巻九丁背・十行・雛壯雛ハ雛のあやまりゝゝぞ。筆工のゝふたゞ

へふゝ。校閲の折検送ーゝゝ。その餘てふをハの錯へゝ。輯毎ふゝるゝ〻〻ゝぞ。第一輯ハ殊ふヨ

かり。帝ゝの本文のゝゝゝぞ。本輯上帙の引ふ孔子家語と引く。有文事者必有武

備とふべゝを誤く文備ゝ作まり。又第八輯の自序ふ荘子と引く。名者実之賓

とある者ハ字と脱されゝ。是ゝり先ゝも自序ふ誤寫あり轉倒あるゝ後ふ至てゝ出せーハ。

いゝふせん悔ども及ばぞ。發販の後その板ふ埋材ゝるゝーて彫更るハ六日の菖蒲十日の

菊ゝそ。長視栄ゝゝ所行ゝるゝとゝ梓行の書肆が欺ぐぞ。兼引ゝゝ等閑ゝく。竟ふ果

さぞゝゝぬハ稀へ。遯莫その訛謬診あるもヨメゝふ本文ハふ所ゝとゝゝゝ。漢文の自序ゝるゝハ二

三百ふ過ざるふゝそをーも校合の為ゝ届ぬハいゝふゝぞゝと思ふ人もあるべれど序目ハ巻々と稿ト

果てハと後ふ綴りぬれハ刊刻も隨て最太う後れーと本文摺刷の折ゝるゝふ急迫〻く校

閲ゝゝるゝとゝく。熟讀重訂の暇ゝるければ二三百の物とハへども。検送ざゝるゝとゝゝるぞ旦出像

ゝるゝふ至りてハ蛇足の為ふ動もとゝとゝ。作者の画稿と違ふもあれど改め画ゝせんハさゝゝ

ゝく。そゝ仍ゝて図くもヨゝり。看官作者の苦界を知〻ゝ後ゝ。そも稿本の訛謬ゝゝりハと

思ハぬハ稀ゝるべ。ハ〻ーへの人のハへ〻く。書を校ゝるハ風華と塵埃ゝも異ゝゝるゝ〻〻陵く

拂ひ去れば隨て又これあり。書と〻〻孰か誤寫する〻〻む。況游戲の策子をや。吾亦久く懸念せざるを知る人ぞ知るべし〻〻む。寢殿毀叢と度外に置て。具眼の指摘に儘まるのみ。

予が著〻〻る物の本或は合巻と唱る繪冊子の多くは板家扶と購求めて。恣に画を新に〻〻且書名を改め〻〻を新板に紛して。翻刻〻〻粥席ぐりのありと少見たるを勸善常世物語三国一夜物語化競丑三鐘などの多は。御高本傳前輯の簡端に既に知へり。近屬又括頭巾縮緬紙衣三巻を重刻まく〻椀久松山物語と書名を改め。出像を新〻くせ〻ののあるを。その書は。文化三丙寅年。書賈住吉屋政五郎の需に應じて。予が綴りつるれば。今に至て三十許年の春秋を麻嵩る舊作を。ど〻知らぬ人は惑されて。新板を〻んと思ふもあるべし。且書名の更ざるも甚多ぬ。狡児の所為なりけん。椀久松山物語と改めし。作者の用意を知らぬ。宜に烏許の點睛なるぬるを。夫椀久は嫖客。又松山は遊女。縱その小傳を為るとも。その書は命くべきものにあらぬ。是を作者の用心とも。かゝる意味ぞもあらぬぞ。放る更改は。莊子は所云候忽

ぐ混沌を損ずと。亦何ぞ異ならん。吾是嗟嘆に堪ざるのみ。又高尾船字文中本五巻。寛政七乙卯年。予が始て綴て策子物語なりけるとき。いとさ拙くて。今ゆゑに又見るに沼堪ぎ嘔吐もあるべし。去歳の冬そを重刻まく。端像を新くせ〻ものの出さり。尓るもその翻刻本は。再板とあるに〻〻れば。椀久松山物語のごは世を欺くに優せり〻〻れども。倶に作者は重刻の美をも告ぎ。恣に画を更改は書名を更く。竊に蠅頭の微利を欲りする欲人を人とも思はぬ。皆是賈豎の所紛ゆゑ有けるよりて。帳合之暇とあるぜ〻是なり。雜貨は唐山の俗語ゆゑ。此間は高麗物の類なり。四十餘年の昔とは。予は高麗物を粥席ぐりの。便是當年の洒落ゆゑ。都て稗官者流の肚裏は。種々元量の意材あり。壁言は雜貨高麗物の品類最も多紀に似れば。扨云云とあるぜ〻。迺當時の洒落ゆゑ。識者の笑を取る為なれども。開も流紛は後れて。どうか〻恐のこと〻。看官疑惑ふべし。然は件の船字文は水滸梵

椒録などを此彼と撮合して綴做るものなれば。四十年前の拙作にて。疎文いふべうもあらず。あるげなるを。翻刻して世に出されて。稗史折せし習業子を。老後に汝が手に讀ぞとく。讀弄せらるゝは異なるぞと恥しむのにあれば。翻刻本は原刻と文の錯へるやうもなからぬや。予はよみかへるに懶ければ。亡児琴嶺が在世の日今茲の春二三月の比にやありけん命して舊本と比校させしに。処々に誤脱あるのみ。大かたは違ふことなしといひにき。よりや寫し僻めたるも今ゆかし疎文をいかゞはせん。看官これを思ひねかし。又大師河原撫子話といふ合巻の繪策子も予が舊作にて。今より三十一年已前文化二年乙丑の冬。畊書堂が刊行せしを今亦画を更て重刻して。新板の如くにして。鬻ぐものありと聞にも是等も作者に告ざりければ思ひかけなく人傳に聞知れるのみ。予はいまだ去る鳥許の重刻さぞあらむ吾在世にすら書肆等が。恣なるかくの如し。ましてや後はいかなるべき。そは浮る名の所以にあれど。名を賣らせてそらはさけれ。近世明和安永年間風来山人平賀鳩溪が戯墨の策子。太く世に行れしかば。その身後に至りても。偽作せしもの多

く出たり。今そのかみ昔をおもへば。こゝろうへにのそおもはざりけらし。さても虚名の昨非を知りて。嗟歎のあまり懐を述る五百なせ長うた反歌あり。これも亦要なきをまみなから録して。めて識とも歌にいへらく。

あだし世にあだし世こそあだし名のなほに渡れたかしりなかりあさ瀬の水くみひちびる筆とすみ田河いさことゝはん人しあらずとも夏の夜はあくるあしまとの外は杖をもひろ待てそちれ翁さびてるまさみかは押菓子や似けもあさつねの真今にあらぬあだし世はされさせてよむしよりもそゝれたりけりあたつちのむすびの神のひやまちかくまでそこの志れ人をうみはてけんもあやしといはまくはれど今はの花のとめでたく山ぬれの実はありとしも消ぞあらぬあだし世の人あれがちやあだしあの名をとしあまで。あだなしまし身をといふにせむ。

反歌

かくれてもなほあだなきみの笠の名をあらはしあまのしらなまし

天保六年といふとしのえつきとをまり四かのあさ一 蓑笠漁隠

南總里見八犬傳第九輯中套總目録

㊐第百四回　富山之餘波　山賊
謁老侯親兵衛訟神助　驚奇特刺客等各歸順

第百五回　富山之餘波　山賊
名山有靈枯樹復花　逃客無路老俠獻俘

㊇第百六回　大山寺春宵　大山寺
犬江親兵衛活捉素藤　里見御曹司優遷陣營

第百七回　館城之着落　館城
牽青海波景能自稲村來　犯黑闇夜曼讚信赴館山

㊈第百八回　館城之着落　館城
義成旨仁寛刑　貞行謁主奏克

第百九回　妖怪之巻　妖怪
八百尼山居誘引敗將　濱路姫病牀被寃鬼魘

㊉第百十回　妖怪之巻　妖怪
反間術妙椿遠犬江　妖書孽仁辭別妙真

第百十一回　館山後巻　館山後
妖尼庭聚兇兵　素藤夜襲舊城

㊉第百十二回　館山後巻　館山後
稟君命清澄伐再叛賊　旋機變素藤易牛狼囚

第百十三回　妖怪後巻　妖怪後
三匠瓶醒里見侯　一級首徳南彌六

㊉第百十四回　釋疑之巻　釋疑
義俠瘞元遺郭號　神靈懲魔全處女

第百十五回　遭際之巻　遭際
前面岡大刀自救孝嗣　不忍池親兵衛釣河鯉

八犬傳第九輯中套目録終　中套下套各七巻共十四巻刊行

義顯於衰世之國
孝出自忠信之家
鶯齋散仙
政木大全成嗣
ちゝきたけなりつぐ

風ちらく安房のありそのようひやみゐ
ちやみちぬちむ
ちとせるくすり
玄同居士
荒磯南弥六
ありそのなんろく
安西出來介
あんさいでくのすけ

忠直無人ノ助ル皇天
錫ニ慶祥ヲ雷水痴叟
満呂復五郎
重時
天津九三四郎
員明
甲冑戸賀九郎
逸時

夏ちろもそえ
北の麻のあを
すやたらの
ちりのり
そ
狂齋
里見御曹司
義通
吾嬬前
あづまのまへ

荒川兵庫助
清澄
浦安牛助
友勝
登桐山八良子

苫屋八郎
奥利狼之助
出高
湊本碗九郎
嘉眞

懿哉八犬之英士。起八方也。妙哉一顆之靈玉。護一身也。仁義禮智。救柔挫剛。忠信孝悌。補君討讎。抑離散有時。行會有日。八士不盍簪者。殆二十餘年。終同帰一州。而威名不朽。然當時載筆者未具。粤肇有演義書。是蓑笠翁所編述。筆端波瀾。與彼水滸三國演義。拮抗。自是書一出于世。而人人方知八犬士所以為犬士。可謂奇且盛矣。余叨賦拙詩。以為證。詩曰。

犬姓俊雄都八人。俱惟里見股肱臣。乾坤到處曾無敵。蹣跚蓑翁稗史陳。

琴籟閑人題 [印]

南總里見八犬傳第九輯巻之七

東都 曲亭主人編次

第百四回

老侯ハ謁して親兵衛神助と訟ふ
奇特ハ驚く刺客等各帰順す

再説那檻尬児們。ハ手ハ槍と閃り。義實主と倉稠で轂を果さんとて闘く折り。思ひ合ふ樹間より。只見る一個の大童男。大江親兵衛仁と名告て。呼禁あつて突然と走り出る。面魂足柄山ハ生育つる。又那酒田ハ時ゐる。ぐい童話ハ聞えける。桃太郎ハあらぐ。と驚ハ呆る。檻尬児們ハ勢ハ忽地胆落て。他ハ怎麼とぞ。ハ憶ハ俱ふ五兵。と逡巡して。左右ハ有繋ハ轂も蒐り。ぐ然とそ。續く敵ハ。そて思ハ回せ。諸聲高く。噫唖ハ。小猴子奴ハ。秣と刈り。牛と鞭ち。狗と走り。兎と赶ハ。その身ハ相応ハ。ぐ。ぐを命も知ぬ。似而非胆勇。由ぐ。仇の助剣して。息絶る折

後悔なる快撃仕せと動揺めて三勢を憑む假猛者槍を拈て左右より咄と嘯て三十一ゐ競蒐れど親兵衛い亳も噪ぐ身を反して素樸の棒を撃て拂ふ向ふ前る兇奮勇剛姚當るべうもあらざれば檻松兒毎い避易して皆竿槍を打折られ刀抜く間も奈麻与民の腕前蹌肩腰骨を撃て悩されて平張伏るそ中ゐ一個の檻松兒聊本事あるのみるべし連りゐ槍をうち閃めして刺んと找むを親兵衛いのめくり反と受住て邪と聲かけて丁と撃るつ劇し兇棒の術中ゐ這も亦槍を打折られ餘まる棒ゐ肩尖を撃られて痛林楚ゐ堪ざりけん苦と一聲叫び果ぎ仆まんとせ脚踏住めて樹の間潛りく逃走るを親兵衛透さず赶ふうりけるゐ往方も知ぬ走り冷笑ひて迂捨て舊所ゐかの東つ撃る仆しる檻松兒四名を腰ゐ准備の藤蔓めく咸犇々と縛めて傍の松ゐ撃住め両袒ぬ袖を斂め裳を下し塵うち拂ひ義實主の身邊ゐ來て額衝兇跪坐て稟まそう烏許かまうゐ我姓名い豫ち聞召ゐ

エもあるべし小可い下總る市川の舟長ゆそゆ山林房ゐ獨子ゆ初名い真平とも又大八とも喚れる犬江親兵衛仁ゆそゐ君ゐけの厄難ゆ我恩神の誨ゐよりて豫知るゐ聊先途ゐ達まるゆせて見參ゐ入るまるとゐ又是神慮ゐ憑れるゆ君臣一致の時日到来怒い輒く對治せられて身ゐ恙き固さゆ欲しくそとゐ辯説さへゐ鄙ゆ大人備うける進止ゐ世ゐ憑まくゆえゐけり介程ゐ義實主い思ひける檻松兒們ゐ伴當三名を射て仆れ已とゐ沼ぎるゐ下ゆ防戰んゆ刀の柄ゐ手ゐ拽ゐ程もあらぎ一個の少年犬江親兵衛仁と名告て樹柱の蔭より頭れ出瞬間ゐ五個の怒を撃る伏せ迂まくる武藝三男敢人柄まゆ愚る憂る梓ゐ且驚ゐ且訝うち目戍ゆそゐ禍鬼ゆうち横ゐ這少年い豫ゆく大士の一人犬江親兵衛仁ゐ兇と名告ゐ既ゐ分明るゐ疑惑ゐ霽れゐ仮ゐ傍る巨樹の株ゐ尻うち拽け眉根ゐ顰め差見右見て原来和郎ゐ妙真ゐ孫とゆえ犬江氏那大八の親兵衛ゐ狩り生れるゐ仁の字の玉を持り田舞ゐ

親房入道優のそもそも犬士の隊ふ入の恩ぜ徒々の痣子ありとぶ妙真并ふ照文仁ぶ噂ふ孫
所ーかと神駅ーとのふとも往方も知ぞるのふ六稔以前のあふして年四だるの秋ぞ。
然ハ和郎ハ今茲九才ぞべーと思ひよ似ぞ身長い約莫三尺四五寸あんん筋骨さ
へる逞ーく凡庸の少年の十六七歳ぞるのとふとも及ざかる武藝勇力單身ーて五個の兇ふ
當りて物ともせず四個を生拘ー一人を斃ー走せーい和漢ふ稀る神童とたのべられ加以年
居ぞ人迹絶て浮世ふ遠ざ徒る深山ふ誰鞠艱て人と成ーけん。訝ーさよ故ーたあふ甚麼ぞ
と問れて親兵衛然ンいあん疑ひ理りと既ふ知ーれまるーー如く小可繞ふ年四ぞる秋菜月の
初旬ぞるのけん舵九郎と叫做たふ方人のる稠ふせられく命危るーー折不測ふ神女の
擁護ふよりて那舵九郎を誅戮せられ這身い神女ふ擁攫れて這山ふ領て置れるる伏姫
上の墳墓ある品崖を宿とーつ。その日よりーて姫上の神灵ふ夜と昏と昏と養れまるり
ーと初ふ究夢ふ似く。思ひ辨よるるーーふ夜く人と成る隨ふ。折々神女の誨ふりて。

我うへと知まるのこるーぞ大毋妙真ハ那時使ふる君の御恩と稟まるて恙もあ〻ぞ今
もなほ滝田の御城内ふ在る支の顛末外伯父大田小文吾悌順の上ハ〻ーこの餘同因
果の六犬士犬塚犬川犬山犬飼犬阪大村の流浪窮泥昨ハ徒々のるあるぞけふハ又筒
様々々のるアそれ。と七犬士ハ六稔以来の屢歴動静。その折々ハ一事も漏さ神女の
告さぜのーーハ瞭然とて那人々の傍ふ立て看るごく知ーぞとのふとゆるぞ然ハ二食四
時の衣皆姫上の神通力ーて那里ーるる取寄せ。徒養れまるーーハ又日ハ我身單ふ
あ〻ぞ這年来同宿の人の帮助もハ人迹絶る深山ふ在りても徒然ーるもあるハ元ふ身ぞ
年毎ふ長伸て既ふ高まるどく我ぞ〻ーー怪ーぞ最も大ぶく〻るるハ日毎ふ神女の賜り
ふ仙將ふ奇果の故る秘理とりて論ーかさけれハ神変奇特とのまくのこ然ハ神女の御恩
德ハ枚挙るふ遑もあ〻ぞ習讀書弓馬戯る剣文学武藝何れとる。皆教させ
まるハ六稔以降修煉せ。本事るぞもゆるぞ。ーれども神女ハ旦暮ふ我仁と共侶ふ品崖

汝が在さぬか。要める折に出顕し。要る折に見えぬぞ。偖而今朝しも姫神の又忽然と立顕れて出可仏が宣ふ。けふ偖々の左側に我父絶ぬ両三個の伴當と領く。我墳墓を見んとて。みづから山踏して。這頭へ来ぬ。とあるんその折不測の寇あり。犯しもしん。とて。そ。が。ふれ。親兵備はあのころをゆゑ。時分と料りて。伴の寇を。對治して。我大人の見参ふ入られ。這餘のもの。箇様々々と叮寧に宣示しぬ。そ。這個一口の短刀と。這錦繡の襦袢一領を。小可に賜りて。又宣ふ。その懐剣。我生前に身を放さるものゆゑ。截味亢覚あれば。そのもの。汝が身の護にせよ。錦繡の襦袢は我ものゆゑ。昨宵縫るものぞ。汝も八犬士の一人なれば。我大人が初見参に。その麁榜の衣のみゆゑ。身の皮を下に鄙備へ。ようてそをも取らる。抑仏と同因果なる。七犬士の黨は我生做せし子が異なる。宿因深ようあれば。孰も疎に思ふべ。然べ他們が窮阨毎に。立形に添て救ざるとなり。めゆゑ。仏が特に薄命を。仏が折二親を喪ふ。剰必死の大阨あるを見過しなる。

その窮阨を救ふ。這里に領て来る。五六稔養育して。像のごとく生育しに。是仏の身単に悲しかるべきを思ふ。あまつさへ親房に。安房の侠民杣木撲平が後ふ。その身を殺して。仁を做さる義侠。そのようあるものそ。その子は料らず仁字の霊玉を得て。八犬士の隊に入るべき故なり。夫仁義八行は人皆天より享るる所。賤しき誰もかも五常八行の心あり。然ければ。世の庸人は通て人慾の私に迷ふて。遂に八行を執喪ざるものは稀なり。偖また世の億萬人に捷れて五常八行を。做さんとは易からねど。就中仁をのみ。孔子も頼く許さ。でもしは素是天とその徳を。ものくまくるに故へけり。自然なるを天と叫。人は在りて仁とは。仏は親の義侠はいとうて。仁の一字を。ものくまくるに。その名を仁と唱へられども。我おそらくその徳を。天とも。しく做さんを。縱至仁に至らずとも。婦人の仁は做ふとなく。今より勉て。殺生を。好まず。忠恕惻隱を。心とせば。事足りて。世に武夫の業は。大刀を帯弓箭を。執て君父の難に。仇を防ぐ。身をしも護るゆゑ。あれど只當前の敵を。撃て。降ると。殺さぬ走ると。捨て。

人と征するよ徳とのそせば則忠恕の義ふ稱ふそ仁とのふ名ふ羞ざるべし頃者と我侄
る冠者義通窮躬あり久く怒ふ含む籠られて今るれ舘山の城内ふ在りまの故ふ義
成夫婦及我大人の最大う胸安らぬもとうしまる大人の登山もの義ふあるれば你先這
高峯る怒とと安く對治して更ふ又舘山へ赴いて那素藤と降と我侄義通を
極ふく大人と義成夫婦の憂苦と慰めまらせるば六稔你と養育あるる我も面代
起もべしいよべよりい是ちぐん既ふ這世の縁盡されば今より永く別れん努怠るる忘
るべらぬもやよ勉よやも勉よ勉よ孫と繰返しつ諭しめて自餘の者ゆも云云と別と告て又怨
然と降聚る雲ふ神躯れて極滅き似く亡ゆひる迹ゆ香氣馥郁と異花降
ア音樂習平天ふ吟えて峯上ふ残る白雲も風のまふくあらぬもるりゆ登時小可各長
慕ふ沼堪ぬ安ふ別る心地して外視思ふそ躊躇しつ。うち泣てのこひしと同宿の
甲乙ふ只管諫慰められて安ふ忘く我ふ回るのらぬ幾の時ゆ亡るべ死今も心の悲と

然てそと本耳しのひかし。倦くあべふふあらぬれば君の歯ふ怒と帝ゆそ。神女の誨ふ恃らと
と思ふ心のいそぐれて前より這頭ふ樹躯れて御登山と待まらしふ果して神女の示現ふ
違ふぬ君ふ怒倣ぬ鹽恐児あり。そ四個と生拘られども鈍や一個と漏せ折るれ追
稠るべ捉ふてあがるるべもあらぬりふ走ると捨よと教ゆし。神の隨意好捨らる
用意ふ是のるるぬ那奴们を對治るゆふ始よりしく又ゆるるせば棒ゆそ總く撃
什しく。搦捕りゆしふ怒るらも奴ふ無して殺ぬとその所行ふそふ那七大士ハ
小可ぬ所在と年来尋難て八人具足せん折るべ参らと固辞まらしふ今も
他郷ふ流寓るその義その信ヨく沼ぬ志と任らと神女の告ぬゆふよりて事
詳ふ吟知るめらぬ然とそも我らを言報やらんとりもるく心苦しゆしふ這身果が那
人々ふ先ぬもて今見参ふ入りなる不思議の計會併人力人智のよらぬ及ぶ及ぶ
らぬ皆是神女の神謀ゆく君ゆ美まり固ぬ怒ふ大槩對治せられて我身の顛

末迄もなく少えあげぬる意外の歎び何哀又これは優しべき程なく御曹司を拯
攬まわらせく御鬱念を慰めまゝんと。その義も御心安う思べし。うちも任せあるべきと
亭主詞の未安なく過去来の事さへ前後斉さる物ゝ云へ宛水を流すが如く辨論
義あり。亦忠あり。現憑しき勇士の嫩生是八犬士の隨一といへども。相貌才学
自然と備る豪傑の心術言語に顕れて思ひ設けるものゝ義實主いつく
づと。聴く連の駭嘆。聴く隨に疑ひの胸うち豁け合はれる事の歎び
大くなるに腰なる扇子を抜き出て。颯と推啓に親兵衛をうちあぶぎ宣ふ通
愛に死後生なるかる言皆意表に出ざるなき。和郎が顛末奇なる哉伏姫は世に
稀なる女侠にて。思ひよ身後に神霊怪なるに灼然にて功績多ゝ和漢に
傳あべしや。頃ろ和郎が六稔の程に最大なる現仙境に生育て。神祭
奇果を旦夕に。こべたりけ。故るゝんそれらあゝ歎。ゆく奇人なる和郎が要に

帶る短刀は我訓ゝ。ゝ伏姫が終焉を身を放さで命根を悍くも断
東西これが當日姫の亡骸と俱に柩に斂めを復茲に看る不思議さよ袷と云恰
と云因あり縁あり。證据あり。身は那痣もあるゝん。佞れば和郎がふゝの搗鬼ゝ
ぬを知るに足れり。今ゝ何をか疑べ。その餘もまく這那と思ひ合るゝあれども急
ぐべ死なるゝ。ばれば。その後にて解示さあり。宣に姫の孝順なる。這八犬士の一人のそ我災
厄を救ひ。ゝる神力不可思議感深ゝ。是に就ても更に又痛を思ふ両個の伴當鮒
舩貝六小水門目の。寇の猟笛に穴所を射さて。忽地命を殞けん惜むべしと嘆
息ゝ。悄然と那亡骸を。ゝへのまを親兵衛慰め宣ふ。ゝ伴當が受ける矢
傷に非如穴所にあゝ。毒笛にて。毒笛は一箭を。呼吸絶るも宜よ以
あ。遮莫小可幸ふ神女の授けぬる回生起死の神薬あ。必その效覿面。活ぜ
とゝ。ゝと。聴き先や試ひんとゝ。ゝ。ゝ。身を起て。矢傷児の身邊に立ち。両個の

矢傷をよくとるゐ貝六郎が死に至るまで。刀柴と握持る義實主の刀あり。そを合放ち。塵うち拂ひ。棒げく返しまゐらせる。義實をとり受合そ。腰に挿副のひけ。倭て又親兵衛が腰に吊る藥籠より。那神藥を幾粒か。遽しく摘出して。噬碎き。矢傷。児們が身の中なる箭を拔捐て。這那共に瘡口へ藥を塗着推容れて。閉じ牙を推開き。餘まる藥を沃ぎ入るに石滴を掬ぶ療養よるの届なる進退精妙。両個を俱に披起して。背を二四巻の撻しく。死せりと思へる貝六目が神茱胃中に下ると。躰心く。忽地に蘇生りく。眼を開き息を吻き。一霎時慢然たりしが。氣力も盛く。我に復りて。痛楚もわらぎるに。共侶ども驚きて。主と思へる。又親兵衛と生口の鑑ぬ児們を。思へりて。今はく我を怪むまぐに。相歎びて。慌しく。主君の身邊を我朝ひく。共侶に禀をもち。臣們が鄙に寇の獵箭に射仆されしを知るのみ。其後のるを覚えぬ。亦るに這一少年。その姓名は人の噂に豫ねて知りける那八犬士の隨一大江生の

折もよく。君の先途に達まゐらせて。那鑑ぬ児們を四名まで生拘りける事の趣。豆姫神の霊驗實助年来那身を這頭に置れて。人と成のりとの。和漢今昔未曾有の奇談耳に入り心に通して。一事も漏さぬ知りしより。覚ての今も記憶せり。偖り程に大江生の介抱。蘇生りて。身はいと安く。矢傷もよく愈ぬ。既に起居に自由を得る。勇士の帮助に。伏姫神の神力にそ。ひけ。得る。天奇大幸最も惶くに。と禀をを義實より聞のみて。原来若們身は仆されも。心神去らで有つるを知りる。狩も亦奇之且その矢傷の立地。命しに逆伏姫が這親兵衛に授けとの神茱の效に憑れり。曩に義通の伴當們。ヨリく矢石に傷られて。一旦命終りしに。稲村の城に。還されて。甦生の奇特ありけると。先神の祐れて。併親兵衛の介抱をいふ。事よりも及ぶ。快歎びとのぶ。と仰ぎ目貝六を俱に親兵衛に。對ひて。額を。恩を稱へ。欽びを舒て。又ぶ。我們が那箭に。共に命の終るも。惜む足らぬとぞ。光侯

つゞ
恙なくあさび千遍悔とも及んや然るを和殿の幇助に依りて君臣無異の幸福あり短絶
詞に盡かたし洪恩ありそれ亦親兵衛聞あるを幷首の口誼に無益の我身何
ら多の功あんや皆君侯の洪福なり神女の冥助顯然たり鄙間の凶事の多くて
だ這檻瓶児们が来歴を責問ざりし意に館山の城内より素藤が拘てる刺客
ゆゑあるんぞ。と目と目六郎に然々と點頭て拷問のゆゑを咱们両個に任
あのまゝでくとらしつも共侶に身を起して。樹枝を折て鞭とし繋置れ檻瓶児们を
鞭撻責んと立蒐まで檻瓶児们に驚慌て跪坐り諸聲揚てやゝ多の人々と責
られぞともゆえあげん既に推量せられぞ。我们に素藤と一味のものでけへども然とも来
歴ありに。あるぞ且鎮りてゆゑのぞや。と叫ぶを義實ち聞のひて。あくんぬ笞を住めて。
徐に言と盡さなよと仰ぎ目見六々美りぬと応ず。左右に別れて跪坐り登時件の檻瓶
児们に頭立てる者とあり。両個が先陳なるや。在下に故の當國の一郡司安西三郎

大夫景連が再任ゆゑ安西出来介景次と叫ぶ倣ものでゆゑと名告れば又一個がゆゑ在
下も亦昔年老侯に討滅される麻呂小五郎信時が同宗ゆゑ麻呂復五郎重時と
叫ぶ倣ものゆゑ然に景連信時の滅亡の比へも我们が親に病死て自他孤児なれば由
縁の人に推乞られて悄々上總に走りつ夷灘の普善村に落住りて世と民間に不娯
たりしに墓田權頭素藤が館山の城主に成りしより安房四郡の旧領主神餘麻
呂安西の子孫に稟ゆゑ扶持せんとて尋るよりの多えに我们両個神餘の兒孫と共に
館山に赴いて来歴を演家譜を捧げて仕えんと請ひに素藤敬び對面して城
内に留め扶持せられる。曾待遇て多用るゆゑ賓客の礼をもて月俸その餘に東西に
ゆく死ぬれば我们心を傾けて恩義に報んと思ふゆゑ似ず素藤に慢に酒色に荒
淫して民を虐げ奢侵を極めて又我们を多くゆゑ禄を減じ格を貶して奴僕の像く赶
使るゆゑと朽惜く思ふゆゑ外に多くの岸もなければ立も沼去らで在りけば程に素藤

八犬傳九輯卷之二
十五
ちんぞう
よりさね
ちんぞう
四郎
老の仔
と
住めば
四刺客
乃ちを
招きて
穏
ちんぞう
よりさね
ちんぞう
五郎
出来介
おち八

猛ふ逆謀あり。縁故い國王の息女濱路姫と取安んと欲うせ宿望稱るぶ執念深ま
ぐふ國王を恨ミて去歳より間ゑく時とゑ。計策を旋らして義通君と食を並めゑ國主あ
ヨヲ勢と引受てのまぐ勝員と分ざるうい是世人の知る所今亦具ふふふーも及ぶ任而
素藤の母比我们を閑室ふ招よせく其くゑう。汝達瀧田ふ赴て義實と狙擊る果ー
ゑぶ事の潰ふ義成と擊る捕んエいと易ゑ。然るとえい房總二國ハ我党ふ入ぬべー汝
達這回大功あゑぶ。安房四郡を聚屋與へて各一郡の領主ふ做さん甚麻ふの義とよく
せんやとて。亦他支ゑ多く憑れーゑぶ我们欲び准備と為ゑ。其夜城内と凝日出て當國ふ赴
ゑる。同志の甲乙絶ふ五名本月の初旬より瀧田の城下と徘徊ゑて潜入くまく欲せーう
ど。城郭總て堅固ゑそのまぐ便宜とゑるざるーふ。老侯けふ未明より天山寺へ參詣の風
聲城下ふ沙えーゑぶ時とゑるうと。斷然て。像のごとふ准備とゑう。迹を跟け去向と料りて
狙擊るまく欲せーふ。微行とまうせども。五六十個の伴當ゐれゑ左右ゑくいゑと下ーかゑう奈

ま〻ゑと思ひ難ーふ。年来這頭の山河の水岌淵を做ーよう。人迹久ゑく絶ゑーふ。ゐる
日猛可ふ水落て。渉ゑふ易ーと。沙えーゑぶ。老侯躰て登山ゑ。亡息女伏姫の墳墓を
禽ゑるとゑ。伴の蒼隷ゑ罵ゑーと。洩ゑーより心勇ゑて。間道と走ゑ。先ゑそ快這高峯ふ
陟り來ゑ。那里の樹蔭ふ埋伏ーゑ。悄々地ふ准備の毒箭をゑて。伴當二名と射て仆ー。
同ド箭局ふ老侯と脱ーゐせーと。弯固ゑる二張の弓弦い忽然と。断れて役ゑ達ゑ者ゑ
ゑ最も怪ーゑゑ。却已ゑふゑ。ゑれい更ふ准備の竿槍とゑ。推含ゑ稠て擊ゑん
とゑー折侯ゑ不測の邪助ゑ。咱们四名い生拘れ一個ゑ酷く擊ゑ悩され辛ーて逃
亡れ。料るふ痛楚ふ堪ぎーて遠くいゑ。仆ゑーゑん現怕ゑ。這少年の勇力武
藝ハ。億萬人ふ捷れーのミふひゑ。年來神女の冥助ふよりて。佞ゑ深山ふ人と成りゑ。塊
談奇話と側聞ゑて。身の非と悟りー慚愧後悔世い是流季ふ及べども。爭ゑ。神灵
冥福併老侯の賢明仁義の俊德ゑ。今茲害と轉ーて這祥瑞ふ逢ふうーあ

らんや然ば昔年景連と信時の滅亡は賢を娼ねて邪計を行ひ非義の利を貪せ
所以も老侯の罪るゝ所なり我們理義を暗ければ只仇とのみ思ひ怨みを恩赦を願ふ
王を要せも反て奸賊素藤の扶持を求ゆその隊に屬て他が與に老侯を刺まくせい
紂を資けく周武を殺さふ似るべ。今い邪念を轉じ濁を去て清に附んと庶幾外
いなも。されども身の罪輕くねば縱饒されかとも。仁義の君のゆ死るべそ切ものゆ
るべ。天神地祇も照鑒おん今ゆ所虛談にあらに願ふい亮査あれかと。那陳ぞ
きい這も陳ぞ。迭代ゆ後悔の招く紛れるうけ。親兵衛これをうち聽て。義無貫ゆ亶に
曰ふ。老侯聞召れ。狡初他們が毒箭をもておん伴當を射仆せ。侯を犯さふ箭をもて
せも槍を引提てうち向ひをゆるゆ思ひひよ那折弓弦の斷れるい神女の擁護ゆい
ん。就てゆ疑ふべきい安西麻呂の黨ぞ。侯を怨るよりもあらぬ神餘い逆臣定包が我
逆ふよう家亡びを我君義旗を揚ゆて。定包を討ゆ。が素より是その德ゆ。小

ゆ因ふ義を仇として。數まくせい甚る意ぞ。その義を質ひいつやとゆを那餘の生
口們い所ひ俱ふ聲を揺て。大江生ゆ我們も來歷來意を。詳ゆ語ゆあげ。疑念我
解ゆ憐愍を垂ゆひ。と叫びるそが一個の且のゆう在下い神餘長挾が光弘の仇報
るうけ。天津兵內明時が弟ゆ。天津九三四郎貞明と叫做もの。當年這地の俠
民とゆそる那木樸平と洲崎垢三が諜ひ合ゆ。山下定包を數るんとせひ反く
那逆臣の奸計ゆ陷られて。光弘主を犯せ。折我兄天津兵內い樸平垢三們と戰ゆ。
命を其里ゆ殞ひ。是より先ゆ我妹い光弘主ゆ仕へかども那玉梓が僞ゆ既ゆそ
主君の亂を孕て五ヶ月ゆ及び。比光弘果敢ゆ數るんのゆ。定包長挾を横領ゆるゆ我
妹い光弘主の亂を孕りと。ゆ知りく。淫婦玉梓ゆあるゆさへ。毒を鴆んと欲ゆ事
車ゆ洩ゆそへゆ在下妹を伴ふ。悄々地ゆ上總へ走りく。蘇々利村ゆの親族許共
侶ゆ潛びく在り。恁而月來ゆ。隨ゆ我妹い產の氣つきく。生れひ男兒を故王の落

紛るゝとて。左も右もあく鞠養む程ゐ我妹い時疫ゑ。竟ゐ黄泉の客とゆゐ。折
く山下定包い里見の義兵ゐ討滅され又麻呂と安西も滅亡をる事の趣ゑ世の
風聲ゐ空くめゝら然とて還るべき家も亡。是より安房さへ上總さへ里見の有とゆ
ゑかど。神餘の子孫を尋求めて。絶る家を嗣せんと宣いをるとゆゐ沙汰もゆゑまのと恨
く思ひ。のみ許せんいさまぐゑ。百折千磨の世を渡り。腋子を養ひまゐせゐ腋子ハ
貧弱ヨリ病ゑ。且その性も人並ゑらねば。年十五六ゐ及ぶも。菽と麥ぐゐ分ゆるを剩風
濕ゐ罹り。脚癈て。年中三百六十日枕の外ゐ友もなく。筆把るだりの氣力もあらぎ。
いと朽惜く思へども。鍼灸某餌加持呪法も。空馮ゆゑて效驗ゑ生來ゑ。何い
せん浮世を潛ぶ身ゐ。あれい神餘の姓氏を憚りて。廼腋子の姓名を上甘理黒之介弘
世と名つけまゐらせ。果敢ゑく時の至るを俟ゐ料らぎ菖蒲田素藤の招糸応しく。
這年来主僕二名館山の城内ゐ扶持せられて。安西麻呂们と同列さゐ。あゝゐゐ素

藤心傲りて。我们をよくゑゝ弘世いその性愍ゑ。剩病者ゑれいと。月俸ゑども年
年ゐ貶して定のごとくゐせられぎ。口を餬ふゐ足らねども。在下ゑのみ苛刻く使ゑ。日毎ゐ
かり。ゑれども這回の密謀を亶て。這個の人々三四名と倶ゐ今日老侯を殺ゑまくせ。
神餘の後を立られざりしと恨く思ひ。ゆゑ。
與んとゆれゐ心迷ひて。賢明德義の良將を暴虐奸詐の菖蒲田が與ゐ沮殺ゑまく
欲りしゐる。先非を悟りて罪を知る後悔い麻呂安西とゆい合さゝと同意ゑ。非如我身い
その伜ゐ結扣頭を殺ゑるとも。弘世主を憐愍て。小禄ゑも宛られ神餘の祀を嗣しゐ。
その年来在下ゑ。圭哥せ孤忠も虚しく死て。栄ある一世の歓び快く目を閉べ。願
ひまゐるハその弟のみ又その男子ハ同志の俠客荒磯南弥六が乾子ゑ。椿村の墓人と叫
做せめでゆんとゆへば又隊ゑハも跪ゐて陳ぜるゑう。小可い菖蒲田殿ゐ。高ぎる恩もいと素
より四主老侯を怨まるゐもゑ。但我乾父南弥六を昔年杣木樸平と倶ゐ定

色を殺さまく欲りして。徐て光弘主を犯して當日殺される。洲崎垢三が外孫。外祖垢三が殺されて折ふる不総角であり。総角でありつゝ上總の夷藩に逃去て年来を歴たりと聞き。徒而件の南弥六。外祖に劣らぬ侠氣あり。垢三が徐て光弘主を犯せを最酷う羞思ひて。神餘の氏族の在るべいつゝ一臂の力を盡して。外祖の汚名を雪んと思ふ日もるに所以に殺す剣白打相撲の術まで。その師に就て習ふ。膂力も人に捷れつゝ里の侠長と衆人に尊敬せらるゝめにそは徒り一程に光弘主の落胤あるよを。夕知りしより。欽びて遂に這天津氏九三郎と交を結びて年来疎ろ祓ひ。今番の計謀に荷擔を容さ。小可と伴ひて三個の人々と共侶に侯ゝ殺さまく欲せりども。這少年の勇敢武藝に敵さべくもあらざれば。辛く命を免きたり。他怒に漏ぎして。囚れて這里に在るならば。俱に奇特に感悟して。みづから新に逃亡るに幸ひるぎ。他が不幸に乗じて。送ゝく招了きたりける義實に衆口衆意の

齊一かりしとうち听ゆして。嗟嘆に堪ぎ。生口們をつらくとえろへてやゝれ天津員明とそ。神力魂異に驚ぎて。後悔陳謝に遑ゝぎ。汝が亡君長挾が光弘に落胤あらば。何とぞ早く徒々と龍田へ告許せざりけん。弘世とやらんがへも義實が知ざるのを。當時金碗八郎ぎ。その子のみと知ゝれば。何ともいで身故りゝぎ。そを義實が執立ぎとく。恨ぎこそは愚に痴れぎ。その孤忠に憐むべ。又景次重時とやらんも。當ぎり。當時麻呂安西と。義實が討ちしに。信時に景連に責られて終に自滅と取りに。又景連に義實が功と媚て邪計を旋らし。攻滅さんとせれ。故に已とを沼ぎ鋒を交へて克とを沼るに徒れば他們が滅亡に則自業自得ぎ。怨る所ろるべ。然けれども麻呂安西の同宗なるめ罪を謝して。軍門に降参せば我当に執念深く出崇らんや。時宜によりて往舊家の後を立て家臣に做さべ。遠く走り深く躲れく。反て悪人素藤に扶持せられに是も亦人を知ざる惑ひ。その餘南弥六

隊人们ハ素是市井の俠者ホーそ。志氣ありとふとも。泰明の醉ハ同ドかるべ。そも左
まれ右もあれ絶ると継ぎ廢れると。真さものハ古昔聖王の道ホ。て開国れ玉あ
善政ヘ陳るよーの違ふ安房殿義威ホ命乞ーく願ひのぞく做ゆさせん。但
その言の證据ホ。異日ゑ。よく鞫問ゑそ賞罰訓いその折ホあ〜ん先ゑの意を沿よ
かーと仰ホ大家額と衝て。敎び面ホ顯れけり。姑ーて天津九三四郎自ヘ明ゑ犬江親
兵衛ホうち對ひて。目今隆八ガ稟ゑーぞく。那荒磯南弥六ゑ。市井の俠者でハ
ども。罪と饒ーて用ひのゞ。必做ゑとあるべ。ゑ。他一旦ハ逃れども敷ゑれ。苦痛ゑ堪
ぎーて。山路と遠く走りかゝホ。其頭ホ躓れく在るべ。ゑ。孩是も亦知るべ〜ゞ。倘逃果
ゑそ。館山ヘ還らガ虛実を草蟲田ホ知〜まく。妙ゑ〜ざる弟もハん。ゑ人を遣て往
方と渉猟ーゆゞ。とゆホ親兵衛領ゑて。我も亦如右思ホ。とゆを目と見六郎ゑ。
共侶ホうち听く。ゑ〜ゞ我们二個ホ一個あん許を蒙りて。陟猟て在ゞ。牽めて

来てんと惴ると親兵衛推禁めく。不知案内ゑ和殿们より。我走一走行て
索んいでくとのひゑも身ゑ起さんとせ程ホ。傍の樹蔭ホ又人ありそ。やよ和子。一霎時
等ゆ其南弥六ゑ。搦捕て先の程より這里ホ在り。やよ。ゆと叫禁めく樹
間と徐ホ出来るゆあり。此ハ是甚麻ゑ者ぞ。开ハ又這下の回ホ解分ゑを聽ねか。

第百五回　名山霊有り枯樹復花さく　逃客路无ー老俠俘と献る

登時樹陰ホ人あり。犬江親兵衛を喚禁め。徐ホ出て来ホけゑを。大家誰ぞ。とち
見れば。則一個の老翁。髮髭毎のひと皓ゑ。枯野ハ殘る小草の上ホ置く朝霜ホ異
ゑ。身體ハ瘦て枝疎ゑ。漁村の松ホ似れども。筋骨ハ衰へぞ。亀齡鶴算ハ我
ぞゑ。尚鑊鑠と輕健ゑ。氣力面ホ見れて。花田の布の綿腸衣の裳と巾く。結と白
布のゑ袖脚衣と。ゑホ朴刀を携へゑゞ。那南弥六ゑ緊く細りそ。牽立々々找ゑ。後

べて方ゐ續くに一個の老媼。ある鹿栲の衣を被て下短ゐ壷折り縢ゲ。打扮殊ゐ精悍あくるゐ眉尖刀を挾みゐが義實を相て遽ーくその眉尖刀を極遣捨て裳と
ゆく鮮下ゑ。阿容ぞ俱ゐぞ找ける。却説老翁ゐ南弥六を索倉縮て義實主の目前
遥ゐ牽坐て膝折俯るそゞ後方ゐ老媼も跪坐て共侶ゐ先老侯と拜ーけり。ゐ
程ゐ義實主ハ這老男女の為体を料り難ゝ訝ーもゐ傍をとろくやよ親兵衛他
らゐとれいう
们ハ原是甚麼る者ぞ和郎と親ゑく相識りとゞ他も亦這山ゐ年来住ゐ熟ゐ
け。鄉嶋ゐ和郎が同宿の者ーもあれば徒然ゑ。ゑ。ぞ問ゐやと思ひ
ら他支ゐ紛れて果さりーゐ其人ゑゞ怪ーらゐゑ。ぞ。とゐ老翁を佶とえゐひてゐれ老
人親兵衛と山居同宿の者ゑゞ近く找ゝそ。顛末を。詳ゐゆえあはよやよ快さと扇を
そ連ゐ招ゐゐゐぞ老翁ハ阿と応ーて先南弥六と貝六目ゐ牽遞与ーゝ主ハ身邊
へ找めゞ老媼も後ゐ跟ておそるく近つく程ゐ貝六目ハ南弥六を又樹下の輟ゐ置て親兵

衛と共侶ゐ主君を左右ゐ守護ゑゝ。當下老翁ハ恭ーく義實主ゐち朝てゐを
ゐち拍ー額を衝る頭を抬て熹ゑゐ。今偖る瀬ゐ逢ざ世ゞ素より賤ーゐ我们ゞ貴人ゐ
近着ゐゐゐそ親くゐのをゐゐゐさんと。弥勒の世まゞ有かゐゐんを恒けれゞも熹上ん言長
くとも聞召れよ。數ゑゑ身の死ーゝ又世ゐ見る。小可ゞ大山道節忠與ゞ父ゑゐけ。大山道
策ゞ舊僕ゑゞ。初の姓名ハ姥雪與四郎後ゐ梶原の褶平と喚れーめ
ゐそゐゐ又柴侍るハ拙荊ゑゞ。名を音音と喚做る道郎の妙母ゑゐ記ゐも及せゐゐ。
今より六稔前ゐ秋来月の初旬我児十條カ二郎及その弟尺八郎ハ武藏豊嶋の戸田
河ゑゞ犬士を追隊の大敵を遮留め厮戰ゐて竟ゐ戰没仕ゐ。折ゐゐ音音ハ両個の
媳婦曳ゐ單節と世を不娛て上毛州甘羅郡白井の城ゐ程遠ゐゐ荒茅ゐ住
宏ゐ在り。来月六日のゐゐ死両個の児子カ二尺八ゞ亡魂の母の宿所へ帰り来ゐける怪
談のゐへゐも要緊のゐゐゐゞれゞ其頭ハ言略ゐゐん。然而とゐゐく言訣ゐ後方を

かゝりやよ音音是より後のこゝろも渾家にそよく覚へるゝを代りて禀上ぜゝとゝろれて
音音も膝を找めく義實王ふ禀まうす目今良人與四郎ぞ堅えあげまつりーどう
賤妾と媳婦ふ煉馬家の滅亡より世と不娯で件の山家ふ在りーかど良人ふ年来
故ありて武藏の梶原ふ流寓ひて漁猟ーて世と渡りあれ折ゝゝ主ゝる犬山道節及
その黨犬塚犬川大田犬飼も不憶く賤妾ぞ隱宅ふ聚合ひー夜艾與四郎も亦悄
ゝふ武藏より来ふけるぞ両個の児子カ二郎尺八ぞ亡魂の媳們ぞ馬ふ乗り牽れ来て大
士の與ふ戸田河ゆ追隊の頭人丁田氏と思ひの隨ふ戰ふて件の頭人町進と毂る果ーゝる
支の形勢と報知ーゝ廿又三親の離別ーゝ年来胡越ふ異ゝゝ必ゝゝ敷くゝの切ゝりーゝ城
道節听て深く憐ゝ這宵亡親道策ふ代りて褚平の與四郎ぞ做ゝー昔の罪と宥めて
酒盃と合ゝーゝ賤妾と夫婦ふ做ーのゝ是ゝの情由ひ忌々ゝて面正くゝゝと
ゝゝ原野合の夫妻ゆ離別ゝゝゝそぞ故ゝれゝも児子の忠孝與四郎も功ゝゝとゝく許さ

まゝて小篠ぞ雪の侶白髪老ての後ふ婚礼ひ世ふ有ゝゝ死とゝゝく恥ーくも亦哀ーゝの方も
ゝく伝りあゝとゝひつ涙吐ゝゝ當下與四郎焦燥て益ゝゝ雑談ひぞもあゝと禁めて
貌と改めて却て次と禀上んの夕音音ぞ隱宅ふ道節們を宿せーゝ白井密訴
せーのあり。ゝれふより緝捕の頭人巨田新六郎助友ぞ軍兵ヨヨく従ゝく不意ふ起りて推
よ寄せゝ支の難義ふ及びゝぞ我們必死と究めー折大士の一人犬田生ぞ曳る單節を我
舊里ゝる行德ふ領てゝんとゝゝれゝゝその説ふ任ゝて拳立置ゝる駿馬ふうち乗せ小
可音音ひ道節と四大士と後安く延ゝん為ふ稠入る敵と姑且防戰ひぞ竟ふ弓折れ
勢究り免ゝるゝもあゝぞれゝゝそぞ仮奥ふ退ゝて家ふ火と放け夫婦ひとゝく煽々たる猛
火の内ふ跳入ゝんとせー程ふ奇ゝるかゝ煙の裡ふ嬋娟ゝる一個の神女最大ゝる犬の
背ふ尻ゝち揖けく出現ゝり小可と音音と制めて若們ひ是忠臣節婦天助感心
ゝゝんゆ努々戰没ゝべゝゝぞ是ふ推乃れと宣示ーて犬子の絆と投被めひ小可們ひ夢

欲と可ふ且駭ぬ且感激し。立日音も俱ふその麻糸ふ携ると躍て中天へ被登されて忽然と黒白も知ぬ迷ふけり。偖而その詰朝るべ。小可も亦音音もまう登くふ我ふ復り。共侶ふ身を起し。驚ぬ四下を顧るふ怪しや身ハ這深山ふ在り。水を纖々とし。奇品山の間ふ流れ松ハ亭々として。涼風の秋ふ唸き黒草地ふ満く。覩熟ぎる花馨ひ林鳥梢ふ集て耳珍しく聲きう是きう意外の奇観るふ。高さ五六尺ぬ年四五ぬる稚児の一人山崖の内ふ在りるふ草花を弄ぶ。餘念もあぎ

[illegible]登時小可思ふ原来身ハ未ぬ寛土ふ到りて。這頭ふ置るめる欲然ぐ前面る谷川ハ俗の口順ふ炒えるる。塞の河原ふあらんぞらん若きぬ那稚児の一個這頭ふ在るよ。あんや七歳未満の孺子ハ。死ていヨ火のあるぞ糸。問試んと尋思とあぎる。夫婦悄々地ふ商議し。俱ふ品崖の頭ふ赴て。哺和子ハ。是ぬ問ん。這里ハ什麼那地ぞや。這山の名ハ何とふらん。倘知りぬ。海ぞや。和子ハ亦何ぞの

故ふ獨這頭ふ置ぎて。其由あんん甚麼ぞや。と問へば件の稚児ハ莞爾ふ笑て。其由ぞ。翁們ハ知ぎるべ。這里ハ安房の富山ハ二十稔あまり前ハ氏里見の息女伏姫上の山居ぬ在て果ハ刃ふ伏ぬ。則這品崖ゆ。墳墓も亦這里ふ在り。我ハ則翁們ぞ故主犬山道節忠與ハ。大々ぬる。ぬ宿因ぬ。八犬士の随一人犬江親兵衛仁ハ過日我身ハ下總ぬる市河の頭ゆ。箇様々々の大尼ぬ。伏姫神の救せぬ。這山へ領て来ぬ。ハ隔昨五日のぞ。其よりて今も姫神の傍ふ在て尉ぬ。徒然ぬ。這里ふ在り。昨日翁們を猛火の内ふ救ふて這里へ領て来ぬ。も亦姫神の冥助ぬ。身の欲ぶと亦さぞや。と毎ふ大人備て且過去ハ悟り未来ハ示ぬ。辨論意表ふ出ざるとぬ。世ふ又ぬ。且驚ぬ且怪ぬる夫婦ハ欲ぶ。ぬ。神女のぬの稚児ふ問りていはせぬ。と思ハ。ぬ。ぬ。原来ぬ身ハ五犬士達の尊ふ初て聞知ぬ。大江陵子でいはせ。欲神女ハ那里ふ在るぞや。と問へば後方ハ指さて。那ヒ那

欲と司に且駭き且感激して。五日音も倶にその麻索に携ると觥て中天へ被登されて忽然と黒白も知らずなりにけり。低而その詰朝なるべし。小司も亦音音も共に寤く我に復りて共侶に身を起して驚きながら四下を顧るに。怪しや身は這深山に在り。水を繊々として奇品山の間に流れ。松は亭々として涼風の秋に唫ず。異草地に満く。観熟ざる花馨香ひ。林鳥梢に集て耳疥しき聲あり。是なる意外の奇観なるに賁てろ頓くそれは年四五なる穉児の一人山屈の内に在りて。手に草花を弄子く餘念もなき入えにけり。登時小司們思ふやう。原来身は冥土に到りて。這頭に置かれたる歟。然しが前面なる谷川は俗の口頭に呼える塞の河原にあらんずらん。若しからずは那穉児の一個這頭に在るよしあらんや。七歳未満の孺子えとも死しては父のあるべし。試に問試んと尋思をなる夫婦悄々地に商議して。倶に品屈の頭に赴きて。喃和子よと言又問ん。這里は什麽那地ぞや。這山の名は何といふらん。倘知りたらば論すべし。和子は亦何者の

故に獨這頭に置れてぞ。其由あらん。甚麽ぞやと問へば。件の穉児は莞爾に笑みつゝ。翁們はいまだ知らざるべし。這里は安房の富山にて。二十稔あまり前に里見の息女伏姫上の山居をせさせ給ひて。果は刃に伏給ひし。則這品屈にて墳墓も亦這里に在り。我は則翁們が故主犬山道節忠與們と大かたならぬ宿因ある。八犬士の随一犬江親兵衛仁なり。過日我身は下總なる市河の頭にて箇様々々の大厄ありしを。伏姫神の救せ給ひて。這山へ領て来給ひしは隔昨五日の事ぞかし。其よりして今も姫神の傍に在して慰め給ふ徒然なるに這里に在り。昨日翁們を猛火の内に救ふて這里へ領て来給ひしも亦姫神の冥助なるに。身の歓びと宣さずやと毎に大人備て。且過去を悟り未来を示も。辨論意表に出ざるとて世に又あるべくもあらねば。且驚き且惶るゝ夫婦が歓びかぎりもあらず。神女のその穉児に憑りてはせなるらんと思ひよければ。謹て原来おん身は五犬士達の噂に初て听知りる。犬江腋子でありせし歟。神女は那里に在るぞやと問へば。後方を指さして。那と那

文溪堂蔵

里ふ在るふと教られても小可と立音音ゞ視ゑ見えあらひども深信ふく胆ふ銘して忝に
ゐ限りゐければ其方ふ朝ゝ身と投俯して。默禱ふ時の移るゝと覚ざるゐ頭を抬れば。
親兵衛腋子の又ゐゐう神の冥助ハ翁夫婦ふ是両個のこゐゐぞ五犬士も悉ゐく寄
隊の虎口と免れゐり又両個の媳婦曳ゐ單節も昨日神女ふ道すれて茲の犬塚の頭ふ
在り那里へゐて快ゐ者と又指さ誨られゐる小可音音共侶ふ敬篤奇哀權判よゐく。
慌惑ハ品崖の頭へけゐ塚下へ走ゐて共侶ふえれば果して曳ゐ單節ハ昨日無くゐる
馬と俱ふ呼吸絶くゐ馬上ふ在り。ちゐく誰何とゐゐう駭謀ゞ両個して曳ゐ單節ゞ
勝けられゐる絆索と急ふ解捨て抱ゐ下してよく看るふ身ふ受ゐる痍ハゐ。憐むべ件の
駿馬ハ肛門より腹内まで銃傷と受ふけん後足さへ蹄さへ血ふ染れて死ゐぞゐ鞍下ふ陷ら
れゐる力三尺ハ着級もゐ俣り。人ゐ大切へけれと思へば婆々と共侶ゐ曳ゐ單節ゞゐと合ゐゐ。
又胸膈と拊試ふ寸口の脈ハ糸ゐも細ゐえれども尚絶ゐ鳩尾温ゐりければ又両個

ちゐく両個の媳婦と抱ゐ起ハ。辟近ゐ石滴と口ふ沃ゐ入れて神女の冥助と口ふ誓ふ祈ゐく
吸活ゐゞせ程ふ経べ曳ゐ單節ハ忽然と甦生して小可ハと云ゐ訝り疑ハ人欲ゐ大
かゐゐらゐ思ひけゐゐ這地方ふ聚合ふと問れゐば我ハ答て伏姫神の霊験冥助を蒙
ゐて萬死と出て一生と得て去の山ふ来ゐる事の顛末又那犬江神童丸尼と神女ふ救れゐく。
本月の五日ゐ去の山ゐゐ品崖ふ置ゐと解ふされ其言の首ゐ疑ハと解ゐ慈ハと醒
せ奇話珍説の尾ゐ聞約ゐ送ゐけ越ふ初く身の往方と神の擁護を感悟
せ事情と告知して和女ハ昨来ゐる馬の深痍ふ死ゐ幾十里ゐ這山へ来て敵れ
ゐも亦神女の冥助ゐく世ふ有ゐゐ再會ハ皆是神の恩徳ハ天ゐ思ひのひと二五
十と解諭ゐ曳ゐ單節ハ聞く毎ふ驚ゐ赤惶ゐ齊月一空ゐ向上て伏拝むこ年
晌許然而小可ハ報ゐ奴ハ知ゐ過日荒芽山の隠宅へ大敵打向と聞え
ゐ折大田主の父保ゐ合鞍ゐ無せられ落奴與ふと絆索ゐ。幾重狭勝着ゐく。

牽退けて。遠からぬ樹間に轂系置れしを。寄隊の雑兵群り來て牽のて去んと競ひ蒐る。犬田主の走り來て。防戦ひつゝ程に刀尖狂ひて。轂系じし馬の絆索を。撲地と斷れしかバ馬ハ猛火に駭噪ぎて。狂ひ走りつ。駐んと欲する敵を蹴倒しつる勢ひ當りがたけれバ。犬田主も術なかりけん。馬ハ快て前の如く去向も知らず走りてけり。その折に奴们両個ハ倶に生る心地ハあらねど尚鞍局より墜もせず膝らるゝ故に縋り得てぞ馬ハ直走りに走ること幾町なりけん。路に居ヨアの野武士在り。奴们が馬の走るを見て駈駐んと走てれども駐るべくもあらざれバ遣過して連發たし銃響高く鳥眼銃に馬ハ穴躬所を轂られけん。嘶きあへず跳騰りて倒れんとせし折から忽然として燐火とおぼしき両個の團燄見えて來て奴们が頭の上に撲地と墜ると思ひしのミ共侶に呼吸絶にけん。尓後のことを知ず侍り。ある隊に大人達のミなさくぞ。轂られし馬の奴们を乗して遥々這深山邊に來るハ。全伏姫神の擁護ることを疑ひなし。世に復るゝことを幸ながら。倘夢にてハ侍らずやと。女兄が報れバ。女弟も續て迭に盡

去來し方の物がたりに日の闌るを覺れバ。當下音音ハ笑しげに曳手單節にうち對ひて。今も爺女々の告ありける犬江神童の身邊にハ伏姫神のそひまして守らせたまふなれども。爺々は奴家なども凡夫の視にハ見えたまはざるなれども那子の神々しきハ。託宣にて知りつべう侍れバ和子の再生の歎びを宣ずもべく尚その後の吉凶禍福を問く往方を定めてんやと立まち。と心を嘱て大家倶に岩窟の頭に跪坐て神童を俯拜きつ禀まうさん誨ふよりも曳手單節もこの地方に來て在りしを見平して介保しつゝ憑再生の幸福を得ることの只惜むらく媳婦们が乗る馬ハ斃れて生べうもはらず他ハいかゞ仕らん又我们ハ那地を投て赴かバ道節们に環會よりはらん。その義も教へたまひねかしと問へバ徐にうちつくゞく然なり馬の亡骸ハ那里の犬塚と推並べて叮嚀に埋めおくべし。戌と午とハ地枝六合へ素より因縁あるにあらず。鋤も秋登も那里にあらん。又這山ハ年居ヨア蟇麗の河水淵と成て人馬の通路久しく絶たり。縱汝達故主を慕ふて他郷へ去んと欲するとも目今ハ山を出るがたかり。咱们と倶に

這品山屈に宿とて時の至るを待ね今よりして衣食の類は姫神の賜ふ皆先ずを
たうべよとそ秋桃四顆を食ふ出てもふるて
たうべふの味ひ死蜜の似くて只一箇をそ飽るぶ是より數日飢ぎりけり恁而又小可们ぞ
曳ふ單節も共侶ふ塚の頭ふ出てたふ果て舊る鋤釜三挺數ふ箇竹の中ふあり
是も神女の賜ふんと思へ食ふりつうち戴ふて児子ふ首級ふ
嚴と埋め塚と造りて又品山屈ふかへ来れば神童は昼寝をぞ
被る衣の薄ふ脇不縫の間よりその背のえぐるが九の命より殿ふ痣子ありて形牡丹の
花ふ似れば大士の黨誰かも同ど像の痣子ありと哀子と今更思ひ合まてあつらく思
惟るふ小可们は少ふり時過失をそれその年来積る功德は亳もふ然るを神女德
まで一家四人の必死を救ふて這山ふ置の直のふるその所以るくはあべきに願ふ這神童を
我们四個ふ守さそ。その徒然いと慰るよまぶるさんと思召る神謀りふぞあらんぞん。

現我故主の大士の隊ふて俱ふ骨肉ふ優を過世ありと豫听ーと今又思へ這神童
仕るの道節主ふ住ると又何ぞ異るべ況五大の黨ふ昨日寄隊の虎口を免れて恙あ
らぞと託宣あり今ゆふ他を求んやと思ふるを音音ふも及媳们ふも耳ふ示せば大
家然やと點頭て俱ふ心をひとふあり守して和子を慰めつ是日よりして鍋釜ゐど米
さへ味噌さへ菜蔬さへ誰がして求るとふ知らねども皆品山屈の内ふ在り又夏冬ふ衣ども
神女ふ賜ふとぞあて求めぎれぞふるとあり約莫日毎の食料の竭んとぞれば孰の間ふ一苞
ぞ又あり中ふ俵藤太が龍宮ふ入りと思へ米苞も恁ありけんと思ふ可の金畫藏ふ最奇
ふり恁而神女は親兵衛腋子ふ習讀書を勧て文学武藝迄もふく教ふ欲ふ
ふ年来間粥ふりーかども小可们が眼ふ神女を拜ぞまりと克ぞ又ん聲も少ふ
獨和子のみ分明ふ細沙を坦て字を寫覚えその書ふて素績とぞ弓ふ數る劍
弓馬の技獨学ふて獨学ふぞ是ぞとて奇ーふ中の一大奇事と思ひしーふ親兵衛腋

子は身長の年々に伸ること世の假子に十倍して六稔の程に三尺有奇五寸許になりぬ。さぞ大
奇異にはあれども。とばかりに少許退きて腰に夾したる巾もて額の汗を推拭へば音音は良人に立
替りて又老侯子稟まをす事の珍奇はこれのみならで尚一樁事の御利益あり初曳手單節們が
這御山に來ぬる比より猛可に腹の大きくなりて壁ば有身なりしかど臨月に異ならねば病痾の所
為にやあらんと思ふものから思ひ難て他們を質し一向なりしに曳手單節が共に豫知せねど。
亡夫達と婚姻の折幾目もあらで別れしより三たび枕を並ることなく一稔あまりを經る程に亡夫の魂に
見えしのみ侍れば今さら奴們が有身るべうもあらねど只怪しきは腹内より折々動くものゝ侍り亦も
甲乙一對の思ひは不思議に侍るかし。甚麼なる病痾の所為ならん心にかゝるは過る年婚姻の比よ
りして今に至るまで月水を見ず血塊といふものゝ年を歷れば毛を生じて形を做すことありと聞しぞかし
あら恐ろし我等が淺ましとのみ思ひ侍りとなしを與四郎がうち聽て凡夫の臆斷ぞうるさき云云と
ものを思んより又神童によしを告て神女の上旨を伺ん然るとぞ躬て件の義を腋子に告て病

痾の根元を問ひけるに親兵衛腋子の答るやう曳手單節は懐妊の素より病痾の所為に
あらず初力二尺八們と漆臥繾綣に一宵といへども其折他們は姉妹倶に既にして有身なり折から煉
馬家滅亡して夫婦離別の憂苦ありその故に胎内なる子の氣血足らねば大きくなるべき臨
月逆に過るに生れざりしぞ其母們さへ今までも知らざりしそが徵は曳手單節が那比より昨今
までも月水なかりしをもて其疑ひを解くに足ん爾るに過日姉も妹も荒芽山の窮難を脱るゝ
折棄たる馬を野武士們の鳥眼銃に斃されしかども馬は猶他們を乘せて這地方へ來ぬるも
その折兩個の遊魄の隊にて他們が懐に入りしも皆是神女の神力によれり那日の烽火は力二
郎と尺八が遊魂なるを神女の憐みあるの故に兩個の妻女の胎に投じて胎内の子は氣血を補ひ且
這山なる神將仙果をとらせしかば姉も妹も胎内なる子の猛可に大きくなりしも恁れど
安産遠からず又何をか疑ん其も併ら年來若們一家父子夫婦は忠義節操拔群
なるにより後々は應報足らぬを造化の神の憐愍て力を用ひ給ひけん神女の冥助のみならず思

ひそ善あり善の報ひあり悪あり悪の報ひあり那房八分身を殺して仁を做る応報と粗相似るを悟りねかと叮寧ふ示しぬ人皆疑ひの霧晴て茲ゆも照す天津日の恵ふ遇る神の加護惶うも亦泰さふ大家涙吐むまでふ感嘆せざるも侍ぐさり紀是より三十日許を経く曳る単節も同日ふ産の氣つ死て安らふ生まるい俱ふ男子ゆそその面影い力二ゆも尺八ゆも肖て毫も違ぐ思ひうけるく両個まで孫を産りー祖父祖母い共倍ふ愛くぐりて甲乙俱ふ合も揚つ産湯浴る谷河の水より深き姫神のあ恵を感じ奉りて秋びふべうも侍ぐさり然い曳る単れ節们い血量もあくで肥立程ふ乳も亦ヨ分ふ出ふ孫们い甲乙よく肥て病氣もあく生育侍り因て父の名をそぶ伏ふ曳るゆ子を力二郎単節ゆ生ミーを尺八と名つけて年来艱育あり。今茲い六才ま成たべ侍り。身長の伸ると知慧力量さへ神々ー紀犬江和子ゆいふーと及ぶぐも侍らねどうち見あい尋常ゆ七八才の童蒙より大ぐらぐらん狡とのひけて吻々とうち笑べ與四郎已々と推禁めて找を出額を衝て又義寛主ふ禀ぎう其後做べ紀支ゆ亥を幸ひ小く鋤秋金あれい畊

作せぞめとのひうると親兵衛腋子ゆ諸ゆ衣食い折々伏姫神の賜らんと仰ぎふ畊て何ふ苡且這山ふい石ヨ分けれい水田陸佃共ふ要ゆ但這峯上ふ観音堂あり。そゆ老侯の志願ゆく伏姫上の菩提の與ふ昔年建立ありーかど落成の比ゆ。そて這山河の水倍て船も筏も竿届らい今ふ迫て二十許年。長禄三年より文明十年まで。参詣の貴賤登山ふ路ゆく那里ふ久く香華絶り翁と媼们い身の勤ふ折々御堂と掃除と香ゆ焼く花とまゆ。親族有縁亡人々の菩提と吊ふそ相応ーかくめと誦さゆ。ーゆい厳敬びて朝毎ふ峯上ふ登りて観音薩埵を拜ぶまゆ。ーゆい稀ふそ別當ゆ。遥けも六稔の光陰十五年ゆ。と時ふ文明麻歩けるーい既ふ亭上る如ー。倭而今日朝未明ふ大江生ゆ慌ゆく小可毎ふ告るゆ。翁们いまぐ知ざるべ。いゆ日よ。這山河の水の猛ふ落られ。今日瀧田の老侯の伏姫上の墳墓と祭らんと登山ゆ。その故い箇様々々と那素藤ゆ反逆の事の顛末并ふ御曹司義通君の御宥免の趣と言語急迫ーく解知ーと又神託と侍ゆ。姥雪们皆羨れ今日老侯の登山の状箇様箇

花咲のうらこ
みそ六
山路ハ迷ふく
南弥六
生拘ら

花さかのうらこ

様の危難あらんとき大江親兵衛に対治さぶらんと易々若们ゆえの折をも老侯に見
参して。倶に御恩に預りまゐれ今より浮世に出る身なれば道節自餘の六士们ゆも再會必
遠からべくば陽世幽冥隔あれば是より永く別れぬ。その美を送らぐ偖へよと神女の仰のごと
といれて音音曳を單節も皆共侶にうち敬焉にて遽く漱に線香を焼に身を浄めく。
那里に在とい知らねども稱児カ二尺八寸も論て大家共侶に俯つ辭ろあん別れの惜る隨に
感涙の坐に找ぬ袖濡れてせん方もなくいたに折ふ花降り音樂ゆえて尊さ越に弥増
せりと然而あべきにあらぐれば一霎時月送りなまろ〻る大江生の時分に料りそ今日老侯に慇
懃に奴们を對治せんと精悍なく身壯衣に棒挾にて。麓路投て出て出発に有撃に
心のとまくて。推續んとて准備をなぬれば音音并に媳婦孫们さへ共侶にとて後に跟
くと禁めもあへず束ぬ折逃迷ひけん一個の嚴恐児足を曳く前面より来ぬに撞見
あたりければ遣も過ぎず組伏せく索を椹ひたに他い身に受る撲傷の疼痛ゆや堪

ざりけん小可如に老人に敵ぬ為ぬ茲に及べり恁而這嚴恐児を奪ぐ這方へ来る程に
同類の嚴恐児四名いと奪ぐ大江生に搦捕られてそぐ招了を聞召も折ぐ〻れば仍ぐ找ぬ
言の果るを等ひたに逃る賊徒南弥六を趕捉んとて人々の既に立まくせ〻れ〻ば已を
泡を聲をかけて君の見参に入るのを〻を小可音音们両個の媳婦が六稔以前に再生せ幸
ひ伏姫神の寘助ぐ〻を禀上る一期の幾び附驥の功過世ありけん一家の栄と亨まい
烏許に恐れ這嚴恐児に隧八と奪ぐ招了よ著れる那南弥六に疑ぐ〻皆是君のあん
威徳を世に有ぐ〻ひと禀せば音音も千歳の寿を〻ん唱ける是を听ぬ里見王後生
口安に至るまで皆駭然と面を注て新奇を感嘆あ〻りけり。そぐ中に義實王扇子を
膝に歌杖に推立頭を傾けてたら〻と听果て感心尤浅ぐ〻姥雪夫婦にうち對て現不
可思議ぐ神助霊驗方才面前に視聽ぐにあ〻ぎに誰ぐ実説と思べ郷高も既に
いまくせりと言ヌ弥より果さて新兵衛も听ねぐ。我いあの年来伏姫ぐ菩提の與に他ぐ

つゐに月の六日毎に精白米五苞并に味噌・搾酒・菜蔬・柴薪の料を大山寺へ遣して食民乞児に施物を與へ又夏冬の厚衾に布を施物に委せ詣来て齋をさうべるもの寡に折も有米いちくそのの餘の東西も残らずとぞ。誰がのて去とは知らねども。佞るの折々あり又布るもの也如右之と物えも久しくるり及又親兵衛が被る繻袴も顧へば出処あるに似たり。昔年は姫が常に布用ひる錦綉の裃児ありけるを他が身故りなり。比大山寺へ遣して調度るゝと共侶に那里の宝藏に弃め置せ。彼と此とよく相似たりとて思ふ六稔以来伏姫が亡魂の親兵衛と若们を養ひ外の東西をも皆我施物の有餘るを問ずして知るべきのみ。佞れば由て来ることあり不思議ゆゑ。不審義にあらず然も思ひ惑宣へば大家吁とぞ驚ふ。よく感嘆ありけるこの這回いまぞ盡さんども楷數に定限あれば卷を更へ第百二回に解分るを聽給へ。

南總里見八犬傳第九輯卷之七終